

特集

核の危機と核兵器禁止条約

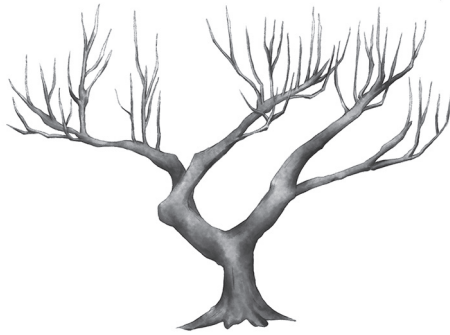
◆特集にあたって

「ウクライナ政府に虐げられた人々を保護するため、『特別軍事作戦』を実施する」と演説、ウクライナへの侵攻を命じたプーチン・ロシア大統領は二月二十七日、「ロシアはソ連が崩壊したあとも最強の核保有国の一つだ。ロシアへの攻撃は壊滅的な結果をもたらす」と核兵器の使用をちらつかせ、米

国と欧州各国を牽制した。
プーチン大統領の「核使用発言」は、必ずしもこれが初めてではなかったが、実際に原発施設を攻撃し占領した、とのニュースもあり、世界は震撼した。「核兵器」の非人道性は、実際には、核兵器は「使えない兵器」であることが、常識になつてきていたからだ。

広島、長崎から七七年。ちょうど、核兵器禁止条約が発効して一年。コロナを理由に遅れていた、第一回締約国会議が準備されているときだった。

問題を抱えながら、とにかく「非核三原則」を守らせてきた国民をごまかし、米国首脳の「先制核攻撃否定宣言」を妨害し、とつくに破綻した「核抑止論」を後生大事に守ることで、軍需産業から



のおこぼれを期待する、情けない日本の権力者たち……。「被爆者の願い」も無視する元首相からは「核共有」論まで飛び出した。プーチン発言、核抑止論、核共有論、とぼけ続ける核大国。それに惑わされ、世界が見えなくなっている「御用論者」……。

一方、核兵器禁止条約第一回締約国会議は、二〇二二年六月二一日からウィーンで開かれた。この日までに、条約に署名した国は八六カ国、締約国は六六カ国に達し、会議には、三三の非締約国と多くの国際機関、八五のNGOも参加、「核では平和は守れない」ことが確認された。

世界はどこへ行くのか? 「核」を抱いて、滅亡の道を歩むのか、「核」を捨てて、「核なき世界」を目指すのか。

二〇二二年前半、世界を揺るがせた二つの動きは、結局、「核なき世界」に向かつて力強く流れる人間の歴史の本流に、逆らい、もがく醜悪な「核大国」と、それに便乗する人たちの姿を、世界に見せつけただけだった。

「法と民主主義」は、こうした情勢から、歴史的意味を持った第一回締約国会議を中心に、その内容、意義、周辺の活動などを報告してもらい、特集とした。

まず、総論的な意味での「核兵器禁止条約(TPNW)第一回締約国会合の成果と課題」については、以前から核兵器禁止条約に取り組んでいる、山田寿則・明治大学兼任講師にお願いした。いまの世界の核情勢の中で、この条約が持つ意味を理論的、実践的に整理していただいている。

なお、このウィーン会議では、「宣言」と「行動計画」が採択されている。一九世紀末から語り継がれてきた「戦争非合法化」運動の一つの到達点でもある。一般メディアで報道されていないが、特集では、「行動計画」は載せられなかったが、この「ウィーン宣言」は全文を掲載した。

次に、核兵器禁止運動での国連の会議には、常に、非政府組織(NGO)の会合などさまざまなパフォーマンスが取り組まれる。今回の締約国会議にも、さまざまな行動が取り組まれた。会合を盛り上げた周辺の雰囲気を含め、現地の動きを日本原水協の土田弥生事務局次長に報告していた。

唯一の戦争被爆国であり、被爆者運動の中心である日本が、この条約に参加していないことはどう見ても異常である。なぜ、日本は核兵器禁止条約をいわば「敵視」し、参加していないのか。

三つめの論考として、この問題を日本反核法律家協会の大久保賢一会長に執筆していただいた。「日本政府は、なぜ、核兵器禁止条約を敵視するのか



——岸田首相の『核兵器のない世界』の実像』である。このほか、今回の特集には、二本の論文を加えてもらった。

ウィーン会議では若者の集会が開かれた。この集会に参加し、大きな役割を果たした青年にも報告をお願いした。首都圏の青年のキャンペーン「KNOW NUKES TOKYO」を進めている慶應大、高橋悠太さんの報告「締約国会議に参加して——私たちの社会は、私たちの手で作る」である。集会に、日本から高校生の「平和大使」も含め、多くの青年たちが参加していることは、これからの世界へのおおきな希望を与えるものである。

そして、もう一つは「法律家の役割」である。一九五〇年代から被爆者救援から核兵器禁止へと動いていった法律家の運動は、やはりここでも振り返って、今後につなげていかななくてはならない。

自身もさまざまな活動されてきた内藤雅義弁護士に歴史を振り返って総括していただいた。「核兵器禁止条約における法律家の役割」である。

戦後七五年を経て、戦争経験者が次々と他界される中で、運動とその意味の継承をどうしていくか、はいまの日本のあらゆる民主主義運動の課題である。

現代の世界で恐らく最も重要なテーマの一つであり、全人類史的課題である「核兵器禁止条約・核廃絶運動」を考えていただく上で、重要な報告を集めている。この特集が、運動の広がりと前進に少しでも役立つことを、編集者としても、大いに期待するところだ。